

基調講演 幻想としての福祉 ～一人一人の希望の社会に向けて～（[日本社会事業大学社会福祉学会]社大福祉フォーラム2012報告）

著者	町永 俊雄
雑誌名	社会事業研究
号	52
ページ	4-20
発行年	2013-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1137/00000199/



「幻想としての福祉」

(テレビキャスター) 町 永 俊 雄

よろしくお願いいたします。このフォーラム自体が、「希望としてのソーシャルワーク」ということですが、私のタイトルは、「幻想としての福祉」という、福祉の総本山のようなここ、日本社会事業大学に来て、けんかを売っているようなタイトルです。あえてやや挑発的なタイトルにしてみました。

というのは、福祉というのはどういうふうに捉えていったらいいのだろうかというのが、非常に混迷している。私は今そういう思いにとらわれているのです。この社会で、「福祉」という言葉自体が、明確な居場所がないままではないのか。とりわけ、そのことを強く感じたのは、東日本大震災以降のことです。

東日本大震災、捉え直す「福祉」

皆さん、3月11日14時46分、どこにいたでしょうか。私は、名古屋で講演をしていました。そのとき、大きな、ぐらぐらっという揺れで、すぐに「これは大きな地震だな」と思いましたけれども、離れているせいで波長が非常に長い、ゆっくりとした大きな揺れでした。

何とかそこで仕事を終えて舞台袖に引っ込んだら、スタッフが講演の話よりも、血相を変えて「町永さん、大変です。大変な地震と津波です」と駆け込んできます。とにかく職場に戻ろうと思って名古屋駅に行きました。駅にはどんどん人は集まってきましたけど、当然、新幹線は全部運休です。人がどんどん待合室やコンコースに集まって溢れてきました。

そのときの光景は大変印象に残っています。そのとき、どんな光景だったのか。

2時46分に発生したわけですから、講演を終えて駅に向かったのは午後5時前ぐらいだったでしょうか、もう一番混む時間ですから、普通、電車が運休したら、群衆からは怒号が行き交ったり、駅員に詰め寄ったりという光景が見られるはずですが、そのときには、そういった光景が一切ありませんでした。みんな、押し黙ったまま、じっと待合室のテレビを見ていました。待合室のテレビには、巨大津波が町を、大地を飲み込む様子が圧倒的な迫力で映しだされていました。

そのとき、私たち、そのコンコースにあふれるようにして詰めかけていた人々はきっと何かを感じたのだらうと思います。つらく長い困難な日々がここから始まる。自分たちは何ができるだろう。明確な意識、意思にはならなかったのですが、恐らく、押し黙ってずっと、ただじっと、テレビのモニターの圧倒的な迫力を持って映し出される災害の様子を見ていました。あの時、人々は災厄のあまりの悲惨さに震えるようにしながらも、心の深い所でこの社会の転換点を見据えていたのではないかと、私はそう感じたのです。

言い換えますと今回のテーマである「希望としてのソーシャルワーク」の明確な起点がこの時、コンコースに押し黙ってうずくまるひとりひとりに刻まれたとも言えるのです。

それからもう1年3カ月が過ぎて、まもなく1年4カ月になります。

私たちは、そのとき以来、福祉はきちんと役割を果たしているのかどうか、を被災地から問いかけられているようです。私は、8年間、福祉をテーマとした番組をやっています。今でも思い出しますが、それからすぐに、連日、生放送でこの大震災を、とりわけ福祉の現場の様子を伝えました。

そのときに、端的に感じたのは、無力感です。何もできない。これだけの災害の中で、私たちは何ができるのだろうか。それまで、テレビで、みんなそれぞれの現場で、自分らしく生きる福祉の在り方をそれなりに伝えてきたはずでしたが、一挙になぎ倒されて、かわりに立ちのぼるのはただ無力感です。

しばらくたって、その無力感から何かを積み上げていくしかない。私たちは、何かの幻想に依拠をして福祉というものを考えていた。福祉を語るということは、よりよい社会への最短距離のように考えていた。そもそも、福祉というのは、良きこと、善なるもののイメージの上に乗っていたのではないか。

良いことだというイメージを持った福祉というのは、もうスタート地点がゴールになっています。そこでダッシュしようと思っても、もうゴールです。身動きできない。本当にそうなのだろうか。私は、この福祉というものを、もう1回根底から考え直そうとしてみました。

現在、福祉というのは、ソーシャルワークであるとか、ソーシャルデザインという、もっと多様なかたちで社会の中に入り込んで活動しようという新たな提言もなされていますけれども、やはり、私は、「福祉」という言葉にこだわりたい。

「福祉」とは何か

「福祉」という言葉は、みんなが知っています。小学生から知っています。でも、その福祉の内容、福祉についてということになると、急に曖昧になります。では、福祉っていったい何だろう。皆さん、どう考えますか。

メディアの世界の人間というのは実証主義的で、とりあえず現場に足を運ばなければならない

ということで、まず、私は書店に行ってみました。

書店に行くと、「福祉の本はどこにありますか」と書店員さんに聞きました。渋谷の大型書店です。専門書がたくさんあります。「はい、福祉の本はこちらです」と言って案内されました。福祉、これからの日本の社会はどうあったらいいのか、福祉から何が得られるだろうか。

でも、待ってください。「福祉」と銘打ったプレートの上にずらりと並んでいる本は、全部、資格の本、制度の本、そんなものばかりです。私たちがこの社会をこれからどうあったらいいのだろうか、一番切り開いてくれる力になるはずの福祉は、書店に行くと、すべて、介護福祉士、社会福祉士と言った資格を取るため、あるいはその制度について、福祉六法の本、こういったものがぎっしりと並んでいます。この渋谷の大型専門書店の福祉の書棚に詰まっているのは、社会事業大学そのものです。「福祉」を専門的にとらえようとすると、それは資格と制度の中にある、ということなのでしょう。

これは、大型専門店だから多分こういう状況だったのだと、次に、街の中の商店街の本屋に行ってみました。もっと面白いことがあったのです。書棚には、もちろん、福祉六法とか社会福祉の受験の本が並んでいますけれども、その下のほうになると、中村メイコさんの「人生の終いじたく」とか、野坂昭如さんの「しぶとく生きろ」とか、鎌田（實）さんの「がんばらない」や「あきらめない」とか、いろんなそういった生きがいテーマであったり、人生論、エッセーのたぐいまで並んでいます。

「がんばらない」と「あきらめない」が両方並んでいたなら、頑張ったほうがいいのか、諦めたほうがいいのか、よくわからないというぐらいに、つまり、福祉というものは非常に間口が広い。これは、混乱しているとも言えるのですが、ある意味で人々が福祉に求める領域が大変に広いのです。制度や法律の本もあれば、人生論やエッセーもある。

これは、いいかえれば可能性であるとも思いま

す。ひとびとの「福祉」に寄せる期待値であると。しかし同時に、それぞれのあまりに多様なこの福祉のイメージにとらわれていて、福祉というものがなかなか明確に浮き上がってこない。それぞれのイメージにそれぞれの幻想をくっつけていきますから、福祉というのがなかなか私たちの暮らしの中の力になってこないのです。

社会事業大学は、まさにここで福祉が生み出されていく大きな場所ではあるのですけれども、私は、素朴に、こんな設問に私たちは答えられるのだろうかと思っています。

福祉というのは、教えられるものなのでしょうか。

今回ここに呼んでいただいた私の尊敬するこの大学の先生に聞いてみたら、「制度は教えられる。それから先は、それぞれが獲得して得るものだ。そのための制度や仕組みを教えるのが、この大学の役割である」と。福祉は教えられるのか。その答えはないのです。

では、もう一つ。もっと若い世代のみなさんはこの設問にどう答えますか。

福祉があると幸せである。

「福祉」イコール「幸せ」という連想がいつもついてまわります。福祉という言葉自体が、幸福という意味合いがあるそうです。福祉というのは、常に、善なるもの、よきもの、そして幸せを連想する言葉です。

ウェルフェアからウェルビーイングという福祉の転換を表す言葉があります。welfareは措置的、恩恵的色彩があるということでwell-beingという自分らしい自己決定のための概念が打ち出されています。しかし、ウェルビーイングというのは、辞書を引くと「幸福、安寧、福利」と出ています。取材をして現場に行きます。福祉の現場は、ごく平たく言ってしまうと、往々にして不幸な現場です。福祉という言葉に一番近い連想語は、不幸という現実があります。いったいどう考えればいいのか。

私たちは、福祉から幻想を振り払って、福祉にいったいどんな力があるのか、どんなふうにして

私たちの生活の中に、つまり、私たちの暮らしの中の本棚に本来の福祉の本を並べることができるかどうか、そのことを考えてみたいと思います。

大震災が問いかけた「福祉」

今、福祉は大きく変わろうとしています。災害以降、特に福祉は確実に変わっています。具体的な取り組みがもう見られています。先日、私は震災から1年3カ月たってフォーラムを開きました。東北の福祉現場で働いている人たちを集めて、それぞれの報告をして話し合いました。そのときに、東日本大震災の悲惨なところは、命が助かるか助からないか、その二つに一つだったということがあります。津波のせいです。つまり、中間点がなかったのです。

命をなくした人がいれば、辛くも助かった人がいた。大災害のときは多くの場合そうです。すると最初に出動するのが、「DMAT」と呼ばれる人たちです。このDMATというのは、災害時の緊急の医療支援チームです。日本語に訳すと、「災害派遣医療チーム」ということになります。

このDMATは、実は、東日本大震災のときは、実はほとんど出番がなかったといわれます。阪神・淡路大震災のときのように、瓦礫に埋まって苦しんでいる、助けを求めるという人は少なかったのです。流されるか、助かるか。その二つに一つだったのが東日本大震災の現実でした。このチームは、早々に引き揚げざるを得ませんでした。では何が必要だったのか。

実は、「命が助かってよかったね」という人が避難所に来て、たちまち窮乏しました。それは、介護が途切れてしまったことです。障がいのある人もいれば、高齢者もいます。実は、一番必要だったのは、その人たちの介護の力だったのです。でも、そこが抜け落ちていた。「最初は、やはり、医療だろう。命を助けるんだ」ということで来たDMATがいなくなったあと、それを受け継ぐ人たちがいなかった。

大船渡の施設の運営者である内出幸美さんという女性がいます。福祉現場では著名な方です。こ

の人が、日本には「DCAT」が必要だと提唱しました。これを訳すと、「災害派遣介護チーム」です。こうしたものを作らなければならない。医療が最初に、48時間、72時間の命を救うために出動した。それとほぼ同時に、DCAT、介護チームも派遣されるべきだ。

まだまだ人材もいませんし、どういう組織が必要なのかも、これから議論しなければならないのですけれども、厚労省も研究チームを発足させています。つまり、これは、福祉の現場からの提言です。これは、単に介護チームを作るというだけではなくて、日本の社会に必要な福祉の力というものを、改めて福祉にかかわる側から提言した大きな動きです。

一つの動きであると同時に、日本に福祉の力がきちんと機能するかどうかを問うた出来事だろうとも思っています。

ライフラインという福祉

1年4カ月たって、経済復興が言われています。しかし、「福祉復興」という言葉は聞いたことがありますか。すべて後回しです。「経済復興がなって、道路ができて、町並みがきれいになって、さあ、そうしたら、今度は福祉のことを考えましょう」自治体の人たちは堂々とそう話します。悪気があるわけではないのです。そういうものだと思います。福祉の発想がそのように固定されている。

福祉が一番必要なときに、DMATと同時に出動しなければならない私たちの福祉の力は、あの大震災のあまりに大きな災害の前に、手をこまねいているのかもしれない。

こんなふうに、福祉を、大きく枠組みを変えて考えてみようというときに、もう一つ重要な言葉があります。「ライフライン」です。ライフラインというのは、途切れてしまうと、命にかかわる、まさに命綱です。

災害の場合ですと、電気、ガス、水道。東北は寒いですから、ガスや電気が来なければ寒さの中で凍え健康を害します。あるいは、ガス電気がな

く料理ができない。飢えがやってきます。水道がなければ生きていけません。加えて、ガソリンというのもライフラインの一つだったのです。援助しようにもガソリンがない。移動手段がない。車がないと、たちまち支援が途切れる。

そういうライフライン。これは、直ちに復旧が望まれ、今回の大震災ではきわめて素早く電気、ガス、水道は復旧されました。

でも、それでよかったのか。もう一つ、DMATからDCATへというふうに、同じような考え方がここに出てきました。ライフラインは、確かに、こうした公共的な命綱、命に直接かかわるような、電気、ガス、水道、あるいは移動のガソリン、そういったものが必要ですけれども、もう一つの意味合いがあります。ライフラインの「ライフ」を考えてみたいと思います。

ライフ、当然、命です。災害のときには命。緊急医療チームが発動します。まず、命。これは、医療のカテゴリーでしょう。でも、ライフはこれだけではありません。ライフ、ほかの意味は何かありますか。「暮らし」です。ライフって、暮らしなんです。だから、DCAT、災害派遣介護チームなんです。

実は、生活支援、暮らしを支えるという視点が、災害のときにすぐさま必要だったのです。それは超高齢社会の日本の現実がありながら、これまで抜け落ちていたことでした。災害に遭ったお年寄りというのは、「命が助かってよかったね」というのはせいぜい最初の1日、2日、それから先には、暮らしがもう危うくなる。暮らしが成り立っていかない。

それから先、働き盛りの人々は、1週間たって2週間たって、暮らしそのものが脅かされる。子どもも、子どもの暮らしが成り立っていかない。暮らしをどう支えていくのか。これもライフラインの一つです。ライフ、暮らしです。

そして、ライフにもう一つの意味合いがあります。人生です。人生の舞台は、地域でもあります。

実は、東日本大震災は、ライフライン、この「命」と「暮らし」と「人生」が根こそぎ奪われました。

もちろん、津波で多くの尊い命がなくなりました。でも、命が助かった人も、暮らしが根こそぎなくなりました。暮らしと人生の舞台である地域そのものが消え去りました。奪ったのは、命や家財だけではないです。その人が自分らしい暮らしを営んでいた地域が、丸ごと波の向こうに持っていかれたのです。

東北というのは、現実として福祉資源がまだまだが乏しい地域でした。それを補完する意味合いで、つながり合って、支え合って、互いに自分らしい暮らしをしていた地域だったのです。そうした地域が辛うじて、人々の暮らしや福祉というものを下支えしていたのですが、それが根こそぎなくなりました。

1年以上たって、今なお、被災地では、ライフラインは途切れたままのところはまだ数多くあります。私たちは、そうしたことをつつい忘れて、復興の成果のほうばかりに目を向けていく。それは、経済復興の面です。福祉復興は途切れたままです。ライフラインは、今なお分断されたままです。

プロセスとしての「福祉」

私たちは、この福祉のライフラインをどうやってつなぎ直していったらいいのか。実は、答えはないのです。あの震災は、まさに答えのない問題を私たちに突き付けています。私たちの社会は、これまでである意味、最短距離で答えを出すことだけを求めています。これはメディアの私も、振り返ればそうでした。

どんなに難問も、テレビの世界では30分の間に答えが出ます。どんなに難しい問題も、30分ないしは1時間という番組の中で答えにたどり着きます。私たちは、メディアに答えを求めています。誰かからの答えを求めています。そうなのでしょう。いつもこたえはどこからやってくるものなのでしょう。大震災で誰もが茫然としてたずみ、無力感にかられました。どうしたらいいのか。答えのない事態でした。しかし、そこから今度は私たちから答えを出すときです。

さあ、その答えを出すためにどうあったらいいのか。今、インターネットは皆さんもうほとんどお使いになっているでしょうし、私も日々使っています。インターネットがごく当たり前のツールになりました。現在はネット社会と言っていいでしょう。

ネットを語ることはほとんど現代社会を語ることです。

その便利、効率の良さは、知りたいという疑問から一瞬にして答えにつながることにあります。思い立ったアイデアがたちまち多様な情報に導かれ、現代は最速のスピードで展開していくようです。

世界のすべてはネット上にあるとも言われます。検索エンジンにキーワードを入力すれば世界中の情報が瞬時に手に入る。クリック一発、今や、情報に関しては素人と専門家の区別は取り払われたと言っていい。情報格差は検索テクニックによることくらい差しかないのです。

そこに何が起こるのか。

「中抜き」です。物流の世界に大変革を起こしたネットビジネスは、生産と消費者をダイレクトに繋ぎ、その間にいくつも介在する問屋機能は中抜きされました。消費者に直接結びつくことで大量生産大量消費の図式は転換され、需要予測はピンポイントの精度を増し、利益は中間搾取なく確保できた。これがネット社会の空恐ろしいまでの実力です。これは確かにビジネスでは良かった。この「中抜き」が日常生活の隅々まで浸透し、いつしか空気のように慣れ親しんだ今、私たちの意識と行動の奥底に、何が起きているのでしょうか。

プロセスが「中抜き」されるのです。「考える」というプロセスがすっぽり抜け落ちてしまうのです。通常、皆さんが何かを疑問に感じ、知りたいと思った時、どんなプロセスをたどるのでしょうか。おそらく、いくつかの仮説を立て、資料を調べる、あるいは誰かに尋ねるでしょう。私たちの思考は行き止まりになったり、堂々巡りをしたり

する。誰かの答えに納得はできなくても、その人の問題意識の有り様が次の道筋のヒントになったりする。どんな資料を調べるかで思考の方向が決まる。時間と手間がかかるのです。かかる分、私たちは幾筋もの考えるプロセスをたどることになるはずです。

が、ネット環境ではその過程の一切が中抜きされ、クリックすればその瞬間に答えの羅列が目の前にスクロールされる。日々、効率の名の陰でそれと意識させずに私たちの思考プロセスの収奪が繰り返されているのです。

考えて見れば、日常、あなたの吐露する意見、考えのたぐいはほとんど誰かがどこかで表明した言説に拠っているのかもしれませんが。果たして自分の考えとはっきり言えるものがどれほどあるのか。中抜きされて得た答えは、本当に自分自身で獲得したものなのだろうか。私自身、そんな思いにかられてしまうこともよくあります。

例えばあの龍馬はどうだったでしょうか。私はそんなことも考えます。坂本龍馬は知りたいと思うそのことのみのため、彼の人生の殆どを旅に費やしたのです。この国の行く末を思い案じ、そのことに突き動かされて脱藩し、勝海舟に会いに江戸に向かい、長崎に旅し京に転じ、多くの人に会い意見を交わし、また旅の空に身を置きました。答えを求めてのその膨大な時間と距離は、無駄だったのでしょうか。そうではなかったはずです。旅から旅の中、龍馬は己の知りたいことを果てしなく検討し、出会った人々と交わした意見のすべての熟成を図り、だからこそわずか31年の生涯で回天の偉業を成し遂げることが出来たのではないのでしょうか。彼にとっては、知りたいことは答えにあったのでない。その答えを求めるプロセスの旅にあったはずなのです。

誰かから答えを求めるのではなく、私たち自身がこたえに至るプロセスをたどらなければなりません。「福祉」は答えではなく、福祉こそ、プロセスです。でもいつの間にか、私たちは「福祉」の答えを求めているのです。自分の思考のプロセ

スの中抜きにして。

なぜ「福祉」はくらしからはじかれるのか

考えましょう。まず、やはり、一等最初に考えなければならないのは、福祉とは何か。「福祉とは何か」と聞くと、多くの人は戸惑います。

私も、番組で、福祉のインタビューシリーズを企画して、随分といろんな方に出てもらいました。「この人と福祉を語ろう」というタイトルだったのですが、出演交渉をするときになるべく福祉関係者ではない人に福祉について聞こうと、芸能人や文化人に交渉します。ディレクターが電話をして、「すみません。『NHK福祉ネットワーク』という番組ですが、福祉について語ろうという番組に出ていただけませんか」と切り出すと、多くの人は、「えっ、とんでもない、私ごときが」、そういう反応です。よく知られた方です。学識もある人です。文化人としても実績のある方ですが、「いえいえ、私などが」という、まるで後ずさりするような方が大変多い。

福祉といいますと、何かしら、正しいこと、立派なことを言わなければならない。そういう思い込みが、そういう人たちの中にも、刷り込まれているんだなと思いました。

福祉というのは、語るのにそんなに身構えなくてはいけないものなののでしょうか。ある意味で、下手なことを言うと非難されると思っている人もいたようでした。もっともっと福祉を身近な生活の中の自分の言葉で語ることから始めないと、福祉という言葉が、この社会の中によみがえってこないのかもしれません。

例えば、中学生や小学生の高学年に、「福祉とは何ですか」と聞くと、すぐに答えが返ってきます。「高齢者、障がいのある人、病気の重い人」小学生の中には「車椅子の人」とこたえた児童がいました。確かにそうでしょう。確かに、この人たちに対する福祉というのは、もっともっと充実しなければならないのですが、同時にこのイメージだけでは福祉は語れません。

「福祉の枠組みが、日本の現実の中で大きく変

わった」と言われていますが、その背景にどんと横たわっているのは、もう皆さんおわかりのように、「みんなのため」という考え方です。もう、限定された人たちのためではない。「みんなの、この社会のために福祉は必要なんだ」と言われています。

その背景には日本の具体的な現実がその奥に横たわっています。

超高齢社会です。

つまり、老いは防ぐことはできない。誰にでもやってくる。ということは、「誰でも障がいを持ち得る。誰でも病気になる。そうなったら福祉が必要でしょ」ということで、「超高齢社会があるから、福祉はみんなのために必要なんです」ということが盛んに言われました。

「そうだ」と、みんなが納得した。「福祉は、みんなのために必要なんだ。福祉はこれから日本の社会の大きな支えになるはずだ」。そこまではいいのです。しかし、ここからどうやら怪しいロジックが展開されていくのです。

なぜかといいますと、超高齢社会、これから先どうなるか。「将来人口推計」というのが、たびたび発表されます。この間も発表されました。日本社会に高齢者の割合がもう、ダントツに上がっていく。この急に上がっていくのは、これから、団塊の世代が後期高齢者に組み込まれていくからです。これから先、どんどんどんどん、この団塊が、固まりが、高齢者となってこの社会に参入されていくということで、「これから先、高齢化率はものすごいスピードでピークになります」と、将来人口推計などが発表されるたびに言われます。「これから50年先は40%を超す。およそ半数が高齢者だ」と。

それだけではありません。日本の現実の切ないところは、高齢社会だけではなくて、少子高齢化、少子と必ずセットになってくるのです。どういうことかという、支え手がないということです。現在は23%が高齢者ですから、これを現役世代で支えとなると3人で1人。2050年度は40%ですから、現役世代でやると、正確には1.3人で1人

です。1人で1人の高齢者を支える。

ちょっと待ってください。最初に、「誰もが高齢者になる、誰もが障がい者になり得る、誰もが病気を持ち得るから、福祉ってこれからみんなのためだ」「そうだ」と言ったのが、だんだん福祉から遠ざかって、「おやおや、厳しい現実だな」という方に傾いてきた。このロジックは、メディアの中で何度も何度も繰り返されます。どんどん福祉から遠ざかっていく方向に誘導されるわけです。

よく言われています。「これからの社会、高齢化率が高いだけじゃなくて、スピードが速くて、支え手がないという日本の社会がすぐそこに来ているよ」と。

このことをずっと繰り返して言われるたび、どんな思いがしますか。とりわけ、若い世代は、「たまらん」と。日本の社会の閉塞感というのは、実は、これからすぐ近未来としてやってくるさらなる超高齢社会。とても大変な社会がやってくるということが、繰り返し言われているのです。最初は、「みんなのための福祉」と言われ、ヨシっと福祉の力を目指そうとしていた人も、この超高齢社会の厳しさを繰り返し言われている間に、何か、福祉からはるかに遠いところまで持ってこられるような気がするの、いったいなぜでしょう。

わかりやすく言うと、50年前は胴上げ社会、9人で1人。今は騎馬戦型社会、3人で1人の高齢者を支える。50年後、肩車社会、1人で1人。支えているのはかわいい子どものイラストだからいいですけども、ここに私のような高齢者がどっかとしがみつかわけです。

でも、こういうことをくりかえし言われると、自然、サブリミナル効果、潜在意識に何かが刷り込まれていくようです。ここに潜り込んでくる課題があるのです。それはどういう課題かという、誰かが誰かを支える。支援する。「支える」と「支えられる」という関係でいつも語られます。支えるとなると、若い世代が支えるのか。負担が大き

い。しかも、その支えなければならない数が半端ではないとなると、これはたまらない。

つまり、この議論の迷走は、最初は措置としての福祉を脱却して、社会原理としての福祉の転換を目指した。その背景には誰もが老いる高齢社会の現実がある。だから、福祉は誰にとっても必要なものだ。それがいつの間にか、誰が誰を支えるかという財政均衡の議論にすり替わってしまっている。

日本の社会を、それぞれ、支える側と支えられる側とに分けるという考え方に福祉は乗るだろうか。そもそも、福祉ってそういうことなのだろうか。「いや、もともとそうだった」という考え方があります。福祉は、もともとは、措置の時代から、救済活動から始まった。貧しい人に恵まれた人、より経済力のある富裕層が恩恵としてものを与えたことから始まったのだから、支援する側・支援される側、そういう関係性で始まった。

でも、ちょっと待ってください。それが、みんなのためというふうになって変わったんじゃないですか、措置というものの恩恵ではないかたちに福祉を切り替えたんじゃないんですかということですけど、あちこちに、この支援すると支援されるという関係が相変わらず顔を出す。

どういうことになるかという、先ほど言ったように、これから、1人が1人を支えるという肩車世代ですから、今の日本の社会を支える世代にとっては重荷そのものです。そこには、もう一つの課題が浮かび上がっています。それは、福祉というのは、常に福祉政策としてしか語られてこなかったということです。

「福祉」の居場所は給付と負担の均衡点なのか

私は社会保障の番組をいくつも担当しましたけれども、必ず財源です。社会保障、つまり、福祉の力をもっともっと拡大しなくてはだめだ。これから超高齢社会なんだから、もっと福祉の力というものを世の中に広げていかなければいけない。つまり、「給付・サービスを充実させましょう」となると、お金がかかりますよね。高齢者医療、

福祉財源、この関係ですよ。この給付と負担の均衡点にしか福祉の居場所がないというのが、福祉政策の考え方です。ですから、ある意味で、うがった見方をすれば、繰り返してこれから将来推計人口が言われ、高齢者の割合が増え、そしてやがて肩車社会がやってくるということが言われるその裏には、「だから、負担を覚悟してくださいよ」と恫喝にも似たアナウンスがあるのかもしれない。

常に、福祉というのは、政策の中に取り込まれて、財源の枠組みの中でしか語られてこなかった。これは、福祉現場で働く、とりわけ、施設を運営する人たちが、自ら思っています。サービスを拡充したい、それにつけてもお金がない、その中でどうしたらいいのか。これは、日々の葛藤です。

そもそも、そうなのでしょうか。私たちは、なぜこの給付と負担の均衡点にしか、福祉の居場所を見つけれないのか。これは、われわれは、福祉政策という枠の中で発想がとどまっているからです。この福祉政策の発想の中で福祉を考えるとこのことの怖さです。では、誰がやるかという、結局、これは、国、政府のやることだ。つまり、お上のやることだ。イコール誰かがやってくれることだということになります。

誰かがやってくれることだとしますと、施策や超高齢社会というふうにはひとくくりにされますから、一人一人の顔が見えない。本来、福祉が向き合うはずの「私のつらさ、困難さ」ではなくて、「超高齢社会を支えるため」という施策になるから、一人一人の暮らしやつらさは埋没してしまうのです。一人一人のライフラインは途切れたままでも、そのまま復興が進む。その陰には、私たちのこうしたメカニズムがあるのかもしれない。

この問題をどう考えるか。福祉というのは、本屋に福祉の力を問い掛ける本がないのと同じように、私たちの社会の中にも、福祉の力を問うものがなかなかないのかもしれない。私たちは、もともと、福祉を考えるときに、こうした財源の中、政策の中、つまり、施策としての福祉しか発想しなかった。

そもそも、日本の高齢社会を、私たちの前の世代、その前の世代、あるいはこの日本の社会はどう捉えていたのかを、ちょっと振り返って考えてみたいと思います。

超高齢社会というと、まがまがしい社会の到来のようですけど、言い方を変えるだけで、イメージが変わります。「世界に冠たる長寿の国」どうです、何となく誇らしくなりませんか。世界一の長寿の国です。実は、世界中が注目しているのです。「先進国の中で、あんなにお年寄りが生き生きしている国はない。その秘密は何か」と一生懸命研究して、「どうやら和食にあるらしい」ということで、今、世界中で和食ブームになっています。

実は、世界に冠たる長寿の国です。この長寿の国というのは、私たちにとって幸せの図柄でした。お正月などには掛け軸を掲げます。言うまでもなく、「翁、媼（おきな、おうな）」の図柄です。共白髪。私たちのシンプルな暮らしの中で、ともに老いて、ともに暮らすというのは、最大の幸せでした。

私たちの幸せというのは、とてもシンプルでした。若いときには苦勞して、いろんなことがあっても、やがて、ともに年老いてともに暮らす。こんな幸せなことがあろうか。私たちの幸せの図柄は、おきな・おうなのこの図柄に象徴されています。当然、図柄の中には亀がいて、鶴が飛んで、長寿のシンボルです。

つまり、幸せというものは長寿だったのです。「幸せ」イコール「長寿」だったのが、今はどうでしょう。「超高齢社会」イコール「不幸、負担」。何でこういうふうになっちゃったのか。

一つ、この図柄を覚えておいてほしいのですが、のちほど、ある1組の夫婦を映像でご覧いただきます。まさにこの共白髪です。しかし、現実には厳しいです。妻のほうは認知症にかかって、もう夫のことはわかっていません。夫のほうは介護で疲れ果て、いがみ合う日々でした。それが、再び、この掛け軸のような幸せをつかみ取る。それはなぜなのか。このあと、映像でご覧いただきました

と思います。

しかし、私たちは、こうした幸せの図柄を自ら打ち捨てました。超高齢社会というようになって、まるで閉塞の社会の原因のように考えています。いったいそれはなぜなのか。そのことを考えないといけません。

私たちは、もちろん、社会保障の問題もあって、経済の低迷もあって、お金の問題が解決しなければ、福祉というものはなかなか十分に進んでいかないことはわかっています。しかし、そもそも、福祉というのは、順調な暮らしのときには後退するものなのです。

ところが、日本の場合には、経済の補完、調整機能として福祉が常に考えられていました。つまり、経済の具合が悪くなったら福祉が出動すればいい。調子がいいときには出てこなくてもいい。でも、これは、おかしい論理です。経済が破綻すると、困った人がたくさん出るので。そのとき、「じゃあ、福祉の出動時期だ」というと、お金がないから出せない。経済、財源の問題で考えると、こうした矛盾をはらんでいるのです。

「生産性と効率」という呪縛

本来、一番必要なときに福祉が出動できないような社会メカニズムを、私たちは作ってしまった。それは、政策だけの問題ではないのです。もっと、一皮ずつはがすように私たちの暮らしというものを見ていきたいのですが、もっと深いところに私たちの意識と行動があります。それはどういふことか。

日本は、戦後、奇跡の成長を果たしました。焼け跡から、私たちの前の世代の人たちが大変な努力をして、経済的には世界第二の豊かな国になりました。最も繁栄した国のひとつとなりました。これはすばらしい成功でした。まさに奇跡でした。私たちの親世代の苦勞に、本当に感謝したいと思います。

ただ、この成功があまりに鮮烈だったために、私たちの意識の奥底まで、ある行動原理が知らず知らずに埋め込まれていきました。経済の成長の

成功のために、私たちに埋め込まれてしまったある意識と行動とは何か。

ちょっと硬く言うと、「生産性と効率」です。資源もないこの日本で経済が大きく成長したのは、生産性と効率を突き詰めて、大変すばらしい品質のものを作ったからです。そこでは、最小のコストで最大のプロダクト、最大の品質のものを出す、最大の生産性を上げるということが追求されました。つまり、生産性と効率、これが日本の戦後の成功の秘訣でした。

このことをずっと日本社会全体で追求している中で何が起きたのか。一人一人に、この生産性と効率の呪縛がかかってしまった。

具体的に言いますと、てきぱき仕事ができる人、これはどういう人でしょう。すばらしい人です。企業でも評価が高いです。でも、これは仕事の評価であってしかるべきです。「てきぱき仕事ができる。あの人はすばらしい人だ」。すばらしい人なのは、会社という組織の中ですばらしい人材なのです。

私たちは、「すばらしい人だ」、「すばらしい人だ」と言っているうちに、その人間そのものをすばらしい人だと思うようになった。人間の尺度として、生産性と効率というものを重ね合わせた。

てきぱき仕事ができる人がすばらしい人だというのは、まあ、いいでしょう。当然だと言ってもいいかもしれません。では、その反対はどうか。のんびりとマイペースでしか仕事ができない人。会社では、評価は低いですよ。それはしょうがないかもしれない。会社という組織の中では、評価は低くてもしょうがないかもしれない。

でも、人間としてどうか。人間としての評価を低く見てしまうことはないだろうか。「あの人は、のろまだからね」。もっと心ない言葉で言えば、「ぐずだからね」。そういうふうに言ってしまうのだろうか。つまり、生産性と効率の評価が、人間の評価、尺度になってしまった。

もっと端的な例で言えば、高齢者はどうか。高齢者は、生産性と効率からは離れています。若い頃は生産性と効率でてきぱき仕事できた人も、

高齢化になって足腰が弱くなって、毎日グルコサミン。そういう人は、どうしても生産性と効率が低くなってきます。そうすると、社会の中の評価は低くなってしまいます。

もっと端的な例で言えば、障がい者はどうか。障がい者は、生産性と効率から離れていても人間としての評価を低くしますか。恐らく会場の皆さんはそうはしない。でも、無意識に私たちは、エスカレーターで高齢者の横を駆け上がったり、あるいは、のんびり歩く高齢者の脇を小さく舌打ちして駆け抜けるとき、それと同じようなことをしているのです。

それを絶対していない人は誰か。例えば、発達障がいをお持ちの親御さんはそうです。生産性と効率からいったら、障がいの度合いによっては、一番離れたところにいる発達障がいのわが子。しかし、その親の多くは決して、わが子の人としての評価は低く見ません。何よりも、ほかのどの親よりも、わが子の人間性をきちんと見ます。抱き締めます。そうした人を見る論理を、私たちは、無意識に生産性と効率の中に打ち捨ててしまった。

人を人とする評価というものを、私たちは、長い間、経済の成長の中に慣らされている間に、生産性と効率に売り渡したところはなかったのか。実は、このことが、日本の社会の福祉の力をとて弱めた。暮らしの中の福祉の力というものを、とても見えなくした。

だから、私たちは、「福祉はもっとみんなのために必要だ」というときに、自分自身をもう1回見直して、自分自身も検証しながら、福祉の力を弱めた共犯者ではないかというぐらいに、しっかりと自分の再検証をしなければならないだろうと思います。

若年認知症の人と「福祉」

発達障がいのお子さんをお持ちの親御さんが、人間と向き合った、向き合わざるを得なかったのと同じように、こうした生産性と効率から離れて人と向き合っている人々がいます。それは、福祉

現場の人々です。福祉現場の人というのは、その人とずっと、例えば介護というチャンネルを通じて向き合います。

これから短い映像をご覧ください。若年認知症の太田正博さんという大変よく知られた人です。若年認知症を10年前に自分からカムアウトして、「自分は、バリバリの認知症です」と言って各地で講演して、「認知症になっても、何もわからないのではない。何もできないのではない。こんなに生き生きと暮らしています」と壇上で歌を歌ったり、みんなの質問にも答えたりしていた若年認知症の方です。

私たちはほとんど友人のようにお付き合いしながら、ずっと継続して取材を重ねてきましたけれども、やはり若年認知症の切ないところで、症状は進行しました。そうすると、何が起ころのか。身近な家族、そして、ずっと見てきた介護職の人たちに対して太田正博さんは拒否を示します。

映像の中で、長年付き合っていた介護職の若者に対して、あの温厚な、いつもにこにこしている太田さんが、すさまじい形相でにらみ付ける場面が出てきます。いったい何を問いかけているのか、その時、福祉は何を問われているのか、ご覧いただきたいと思います。

映像

かつては、いち早く若年認知症であることを公にして講演活動などを通じて啓発活動をしてきた太田正博さん。しかし最近では症状が進み、日常の暮らしに支障が出ている。

「助けて、助けて」と呟きながら部屋を歩き回る太田さん、トイレの場所がわからない。すばやく妻の栄子さんが近寄り、「トイレ？」とトイレに誘導しても、しかし太田さんはその排泄がうまくいかない。「タイジョブ？ 場所、わかる？」気がかりな栄子さんが声をかける。そのうち太田さんは突然声を荒げる。

「なんでいちいち、そんなこと」「なんで言われなきゃならないんだ」

どうすればいいのか、妻の栄子さんは主治医と相談し、便器の縁に赤いビニールテープを貼ることにした。これならトイレの失敗が防げるのではという思いだ。しかし、太田さんはそれを見て余計苛立った。「なんでこんな事するのか」

太田さんの、喪失する自分自身の不安はそのまま、栄子さんへのいらだちになる。栄子さんのよかれと思う介護の手立てはことごとく、太田さんの不安をかき立て、怒りの言葉になって突き刺さる。どうすればいいのか。

デイサービスのスタッフが迎えに来る。それまではにこやかにデイサービスに通っていた太田さんが、この日はベッドから離れない。顔見知りのスタッフである。言葉を変え、ソフトに誘いをかけるが、太田さんはおじ黙ったままだ。その内、凄まじい形相で年若いスタッフを睨みつけ、しぼり出すように言い放つ。

「もういい。もういい、なんなんだ、まったく」

スタッフも妻の栄子さんも凍り付くように立ち尽くす。

さあ、この現実を私たちはどう受け止めるのか。ここには、もちろん、一つの答えがあるわけではありません。ここにある現実、支援する・されるではなくて、まさに、人として向き合ったときのものすごい葛藤、ものすごい対峙の仕方、そこにこそ福祉の力が初めて生まれる、そんな光景です。

言うまでもなく、認知症の人というのは、自分で自分の症状を説明することに困難があります。症状が進行して、妻も介護職もよかれと思ったことが全部拒否される。それはなぜだろうか。

失敗しないようにトイレに赤いテープを貼る。しかし太田さんはずっと連れ添ってきた妻の英子さんのしたことに、大変な拒否感を示す。それは、主治医によれば「あなたはこれができないのよ」といつも言われている、面と向かって、「あなたは排泄に失敗する人」と言われているように太田さんが受け止めているのではない、という捉え方。

自分でも情けない、と太田さんは思っているのではない。それを、日々トイレに立つたびに、「あなたはだめな人」と言われているように太田さんは、受け取っているのではないのか。

それは、相手を責めるだけではなく、なにより太田さん自身がそうした喪失に対する大変なおびえと不安があるのではない。その人とどう向き合うのか。何もしなくてもいいのか。何かしたい。でも、よかれと思ったことが拒否される。そういう緊張関係。ぎりぎりの人間関係がここに現れて

いるようです。

太田さんは若い介護職員をにらみました。「もういい。俺は、ただ自分らしくいたいんだ」ということを言いたい太田さんに対し、「あなたはデイサービスに行く人、困った人」と言われたように受け止めたのかもしれない。もちろん、介護する側にはそんな思いはない。善意の固まりで行く。そのことが拒否される。これをどうすればいいのか。

私たちは、人を人として捉えるということを、ごく当たり前に、当然のこのように言いますけれども、実は、一番困難なのは福祉の現場であるのかもしれません。

このことに関しては、医療の立場から一つの提言がありました。認知症の人は、何もわからない人ではない、ということです。こうした暴言や暴力などは、BPSD（周辺症状）、つまり、中核があって周辺ですが、「周辺」と言うと二義的な、二次的な意味合いがあるので、「BPSD、つまり認知症の行動と心理症状である」と。これは医療の側からの発信です。砕いて言うと、「その人が暴言や暴力を吐いているのではなくて、その人の認知症という疾患がそういうふうに表示させている。その人の何か不安やおびえや大変なつらさみたいなものが、行動や症状に現れている。そこを捉えましょう」と。

ですから、「周辺」などというふうに片付けてはならない。「BPSDですよ。これが、介護や家族の一番負担になりますよ」と。今まで、「問題行動」と言われていたのです。介護の立場から、「問題行動という言葉はやめましょう」と言っています。「周辺症状」、「問題行動」という言葉をやめて、「BPSDは、認知症の人のメッセージだ」というふうに捉え直しましょうという考え方です。

ですから、その時初めてあの太田さんの憤怒の表情が、介護の「拒否」ではなく、必死の想いの「メッセージ」だと捉えられる。ここに福祉の力が生まれている、私はそう思います。

「パーソンセンタードケア」

「問題行動と言うのはやめましょう」というのは、随分前から言われていました。「徘徊」というのも、「よし、徘徊して問題を起こしてやれ」と認知症の人が言っているわけではなくて、その人の何か、家の居場所のなさ、その不安感がBPSDにつながっているんだと、医療者の側から提唱されたのです。

実は、これと呼応するようなかたちで、介護の側からも大きな動きがあります。それが、「パーソンセンタードケア」です。これは、イギリスの心理学者、トム・キッドウッドが提唱したものです。認知症の介護のときに言われていますけれども、直訳すれば、「人を中心に据えたケア」ということです。

どういうことか。お世話の対象ではないということです。介護の側の都合や思いだけでお世話、支援するということは、本当にその人のためになっているのかと問い直すことにつながりました。これを聞いたある施設スタッフが言いました、「そうか。俺たちのやっていることは、ワーカーズセンタードケアだった」。つまり、施設の働く人の都合によって、「はい、トイレ行きましょうね」と言って一生懸命、お世話する。しかし認知症の人は実はトイレではなく、庭に出てみたいだけだった。それが積もり積もると、認知症の人にとってはとてもつらい居場所になってしまうこともあるのです。

たまに見学に来る家族にとって、「あの介護スタッフが一番熱心で、かいがいしいね」という人が、実は一番抑圧していたということがあります。「トイレに行こうね」。でも、トイレに行きたいのではなかったかもしれない。本当は、手を洗いたかった、お茶を飲みたかったのですが、ちょっと立ち上がると、「はいはいはい、おばあちゃん。トイレ、トイレ、トイレ」と言う。その繰り返しになるたびに、どんどんどんどん抑圧されて、それがあの日、BPSDとして暴言、暴力、あるいはいらいらとして現れてくる。

その人を中心として据えたケア。これは、実は、そのBPSDという医療側の提言を受けるようにして、介護職の人が、現場で話し合い、共有し積み上げて、作り上げてきました。

介護職、特に認知症の介護の人たちが、センター方式という、ある種のメソッドみたいなものまで編み出しました。今、認知症介護の世界では、「認知症は何もわからないのではなくて、どんなに症状が進んでも生き生きとした、みずみずしい感情は生きている。認知症になっても心は生きている」ということを合言葉にしてきました。

ここでのケアのあり方は、実は認知症の症状の改善という結果のみを目的とはしない、ということなのです。ケアはその人の自分らしさを支える、のがパーソンセンタードケアであります。先ほどいった「生産性と効率」ではなく、ここでは、「その人らしさ」に向き合います。私たちの社会は、仕事ができる人、勉強ができる子から始まって、障がい者、あるいは高齢者というラベル化で充満しています。それはどこかで「生産性と効率」で人を評価することとつながります。そうしたレッテル、ラベルで識別するケアではなく、その人自身を見ているのか、太田さんの厳しいまなざしはその本質を問いかけているように思います。

パーソンセンタードソサエティへ

このパーソンセンタードケアというのは、もちろん、認知症だけではなくて、私たち自体の問題です。私たちの社会は、パーソンセンタードソサエティになっているだろうかということです。

ケアの人たちは、「寄り添う介護」というふうに、わかりやすく言っています。なかなか言葉は難しく、「寄り添う介護」と言うところか、ふわふわとした感じになって、どうも、しっかりと根付くところが難しいですが、「パーソンセンタードケア」とやや専門的になると、ある種の意味合いが見えてきます。しかし両者は全く同じことです。寄り添う介護です。

このことの普遍性について、もう少し考えていきたいと思います。なぜ、パーソンセンタードケ

アというのは、私たちが手にしなければならない重要な福祉の一つのツールであるかということを考えたいと思います。

先ほど、支援する・されるという関係性をどう解体するのか。それだけではない。でも、実は、本当は難しいです。障がいのある人や高齢の人がいて、支援したい・支援されるという関係性はいつも残ります。施設に来る人たちはそうですね。そこを、支援する・されるではない関係っていったいどういうことなのかということですが、全く別のところからあるヒントをもらいました。

それは、私が、自死遺族の皆さんといろいろと番組を作りながら話し合ったときです。自死遺族の人は、誰かに相談したいけど、相談できない。つまり、自死というのは、「語ることのできない死」と言われました。自分の一番身近な、例えば親あるいは配偶者が自死した場合に、その死の悲しみやつらさを人に言うことができない。それは、自死ということだからです。

でも、年月がたって、その子どもたちが相談したいというときに、何が最初の障害になるかです。話のわかりそうな友人や先輩などがいて、相談しようと思う。どういうかたちになるかという、向き合うのです。相談相手としてはその誠実さから「よし、今日は、とことん相談に乗ってやろう」と向き合う。

私たちは、支援する・される関係を「向き合う」という言葉で言い換えられないかと思ったのですが、その「向き合う」というのも、実は、大きな圧力なんだと言うことに気づくのです。向き合うというのは、例えば、こういうふうに椅子を持ってきて、「相談に乗りましょう」と。どこかで見たような光景です。取調室です。つまり、先ほどの認知症と同じように、どんなによかれと思っても、その関係性において、正面に対峙すると、そこに強者と弱者の関係性が生まれてしまうのです。

「さあ、何でもいいから言ってごらん。今日はとことん聞くから。ね、何でもいいからさ、言ってごらんよ」と畳み込むように言われたときに、

自死遺族の若者は、それだけで、のしかかられるような善意の圧力を感じて何も言えない。

そうではない関係性があるのではないか。これは、ソーシャルワーカーからの提言で出ました。椅子の位置を変えてみる。どういうふうに変えるか。向き合う関係から、ベンチのように、こういうふうに椅子を二つ並べます。そこに座る。何が起こりますか。2人が同じものを見ます。

「もう梅雨が明けるね」、「雲が流れているね」、「明日はいい天気よ」、「ああ、夕方になると涼しい風が吹くね」、きっとそんな話から始まります。同じものを見えています。隣の大きなつらさの中にある若者は、「あのね」、ぽつんと言います。「なあに?」。そして、糸をほぐすようにつらさが伝わっていく。横に並ぶ。ともに生きる。ともに歩む。これは理念ではないのです。実際の暮らしの中の息づかいにあるのです。ひとつの「福祉」のありようとしてとても示唆的でもあります。

私たちの関係は、いつも、ある意味で、向き合うというのも生産性と効率の中で出てきたのかもしれない。「さあ、時間が限られているからな。三者面談だ。先生と話そう」、そういう場合はこうなりますよね。そうじゃない関係。

でも、この関係だと介護は成り立たない。どうすればいいのか。この両者を包むような、ここに「支援」が欲しいのです。本人だけではなくて、本人とともに暮らす人にも、支援があってほしい。つまり、家族だけでは無理なのです。医療だけでも無理です。介護職だけでも無理です。それを全部引くくめて、私たちは支えられるか。

それが、地域ということです。私たちは、「地域」というと、最初から何か、「とてもいいもの」という、またそこに幻想をくっつけてしまいます。地域を生き生きとしよう。でも、そんな地域なんか、今どこにもないです。地方に行っては過疎化と財政難、都会の中では孤立、私たちが幻想を抱くような地域というのは、この日本にほとんどないと言っている。

この間、沖縄に行ってフォーラムをやってきました。

沖縄は、100歳以上の人口比率がずっと全国トップで長寿の島ですけれども、もうため息混じりです。島は変わった。長寿の島は変わった。もともと、島の中には、「いちやりばちょーでー（一度会ったら皆兄弟）」とか、「ゆいまーる（相互扶助）」という地域の力が根付いていたのですが、急速にそれが解体されていく。それをどう取り戻すのか。それがとても難しい。

この「地域」というものの幻想を振り払って、私たちはもう一度、地域、さらにこの外側にある私たちの社会を「パーソンセンタードソサエティ」として考えたときに、私たちがこれまでの前提とした福祉という枠組みを考え直さなければならぬ。

今まで前提としていたわれわれの福祉の枠組みというのはどういうものかということ、誰もがやがては結婚し、子どもは2人で、男が外に働きに出て、一生一つの会社に定年まで勤めて、その間、女性は家庭にいて二人の子供の育児と内助の功に励む。これを前提にして、日本の福祉は形作られている。福祉政策もそうです。

今、この前提が崩れているのです。「男が定年まで働いて」、もはやあり得ません。「子どもが2人か3人」、とてもそんなにいません。「女性は家庭に」、時代錯誤です。女性が社会に参加するのがあたりまえです。しかし、実際に、私は以前のモデルだったのです。私はそうだったけれども、私の次の世代、例えば私の娘はもう30歳を過ぎていますが、仕事が好きでばりばりやっていて、いまだに結婚していない。ひょっとすれば将来も結婚しないだろうと思います。誰かいい人いませんか。

そういうふうに、これまでの社会モデルがすっかり変わっているのですけれども、オールドカルチャー的な、従来の戦後の日本の経済成長をもたらしてきた家族観あるいは社会モデルをそのまま前提にして、福祉の力をそこに植え付けようとしている。それは企業社会に依拠した福祉であり、無限の経済成長を前提とし、そこに「生産性と効

率」の価値観を潜り込ませた社会の「福祉」です。

「地域」の再生

新たな社会の枠組みが必要です。新たな地域の再構築が必要です。

そんな取り組みも、やはり介護の現場でやっています。というか、やらざるを得ないのです。たまたまさつきも認知症だったから、わかりやすくするために、次にご紹介するのも認知症の取り組みです。広島県の「古田のおうち」というグループホームです。これが大変ユニークなのは、ものすごく大きな、飛行機の格納庫のような倉庫を買って、その中にわざわざ9棟の家を造った。

それぞれグループホームで住んでいるお年寄りに、自分のかかり付けのお医者さんが訪問診療に来る。地域食堂もあって、地域の人も自由に出入りして、子どもも来る。認知症の人はグループホームに住んでいて、そうでない人はデイケアにやってくる。そういう仕組みを作りました。疑似地域です。

そこに1組の夫婦が入りました。87歳と89歳の老々介護です。夫が、認知症の妻を見ていました。男の介護です。よくあるように「何でこんなことできなかね」と、夫はいらつく。いがみ合って、疲れ果てて、この夫婦はもう破綻寸前でした。そこで、この古田のおうちに入ってきました。

そうすると、今度、介護に疲れた夫は、日中はデイケアに来てのびのびと過ごす。そして、認知症の周辺症状、BPSDを出していた妻は、グループホームでいつも穏やかに、何事もないように、昼でも「眠たいね」というふうにして過ごしている。ところが、夫の顔はわかりません。すでに夫の顔はわからないのですが、とてもいい、夫婦ならではの光景が見られます。

そしてもう一つ、ぜひご注目いただきたいのは、そのときの支援スタッフのたたずまいです。目立たないのです。何をやっているのかわからない。ただ、そこにいただけです。その支援の力の大きさも、皆さんは感じ取っていただけたと思います。

映像

「眠たいけ」

ひとりの認知症の婦人がグループホームでうとうとししている。そばに付き添うスタッフも微笑んで見守る。

広島県西区のグループホーム「古田のお家」に入居している三宅ハツさん。87歳。これまでは家で89歳の夫とともに暮らしていたが、認知症の進行でひとりでは動けなくなり、入居。今では自分で歩くことが可能になっている。

ここでは、一人一人が気ままに過ごせる。また、かかりつけの医師が訪問診療してくれる。利用者の中には歯科医に来てもらって口腔ケアを受ける人もいる。この日は歯科医が「歯に汚れがちよっと付いとるけ、これ、きれいに取ろう、ね。そうすれば、風邪引いたりせんけ」そんな会話を交わされる。

夫の勝さんはこの施設のデイケアに通っている。勝さんは最後までハツさんの介護をしたいと思っていたが、介護中に足を痛め断念。介護できなくなったことに今も心を痛めている。しかし同時に、その介護の日々では、互いに笑顔も消え、いがみ合うような時間だったと言う。「あの頃の二人はちっとも笑わなかったのう。笑う余裕がなかった」

今グループホームでのハツさんの元気な姿に驚きと喜びを感じている夫である。

このグループホームでは「地域食堂」も併設されている。地域の誰もがやってくる。勝さんはそこでの食事とおしゃべりも楽しみのひとつだ。サロン活動も盛んで、かつての介護の日々では思いもつかなかった趣味にも地域の人に教わりながら楽しんでいる。

ハツさんは既に夫のことがわからない。しかし、夫の勝さんがデイケアに来ると必ず会いに行く。

スタッフが語りかける。「お父さんが来ているよ」ハツさんは言う。「お父さんじゃないな。うちのお爺さん」「お父さんよ」「へええ」隣の勝さん共々、和やかな夫婦の時間である。

勝さんが家に帰る時間が来た。

「また来るけ。みんなと仲ようしてやらなだめだぞ。な」肩に手をかけ、勝さんが語りかける。と、ハツさんは突然、顔をくしゃくしゃにして泣き、顔を手で覆う。

「うんうん、あんたも気をつけんしゃいよ」そういつてハツさんは帰っていく夫をいつまでも見送る。

いかがでしょうか。こういう地域があればいいのです。私たちは、「超高齢社会、来てはいけな社会だ、とんでもない社会だ」と思いがちですが、けれども、必ず来ます。防ごうとしてもこれは難しい。むしろその社会を所与のものとして受け止

め、それを前提として福祉の力というものを組み立てなければならない。

一つのヒントがあります。あそこの支援スタッフは、本当に目立ちません。ただそばにいてだけのように見えます。その支援のあり方、支援してやろうと意気込んでいません。一緒にいて、ともに同じ空、流れる雲を見えています。

ハツさんはすでに認知症で自分の夫がわからないのです。でも、そこに寄り添う介護が機能すれば問題ではないのです。夫婦の一番美しいきずなの部分が残っているのです。いいじゃないですか。人間の一番美しい部分を最後まで残す。問題化し、問題を解決するのではなくて、できること、まだ残されている能力、すばらしい部分を、どうすくい上げていくのか。支援の一つの姿です。

これは、きっと出来ることです。私たちは、ともに生活者として、その人の問題ではなくて、その人のいいところ、輝くところ、すばらしいところをすくい上げる。それは、その施設で働いている人にとっても、とても大きな生きがい、やりがいです。

これまで、福祉というのは、福祉政策の中で財源を気にしながら縮んでいました。また、福祉で働く人も、常に、自分の支援の対象者を作り出すことによって自分の存在を確かめてきました。そうではないのです。同じ生活者として、同じ人として、同じ方向を見ていく。つらいことはみんなで分け合って、喜びをともに喜ぶという、私たちが持っていた地域社会の一番美質のところを取り戻すことができるのかどうか。

私たちが創る「共生社会」

たまたま認知症を採り上げましたが、もちろん認知症だけではありません。この社会の閉塞というのは、もっと深刻な部分がいっぱい出ています。先ほど言った自死の問題、こうした問題を、実は、私も、一つ一つ個別の問題として、モグラたたきのようにして採り上げては、解決を探ることに懸命でした。答えを出すことにきゅうきゅうとしていました。

そうではないのです。例えば、自殺問題一つだけ取り上げて解決することは困難です。こうした閉塞したいろんな状況、「ひきこもり」も、「子育て困難」も、そこに通底するものはいったい何なのかを、私たち一人一人が見なければならない。それは何なのか。

よく言われていることです。私たちが、薄々とか、明らかに感じていたことです。人々は孤立し、隣の人に無関心であり、そして、自分とは異質な人は排除してきました。エクスクルージョンしてきました。インクルーシブな社会にできるかどうか。それには、その反対の、私たちの意識と行動が必要です。

「想像」と「関心」と「共感」、言ってしまうえば簡単なことのようにです。同時に、また、随分と難しいように思います。でも、皆さん全員が、この関心と共感と想像の中でここにいます。子育てがそうです。子育てをする親は、自分の関心と共感と想像のありったけを注ぎます。おなかが痛くないか、おしめはぬれていないか、ちゃんと育っているのか、機嫌はどうなのか。

そのようにして私たちは共感と関心と想像力に育まれて、今この場にいます。私たちは、その力を持っているのです。私たちの持っている力を発揮しなかっただけです。生産性と効率に受け渡してしまった。私たちは、全く新たな何かを作り出さなければならないのではなくて、私たち自身をのぞき込むようにして、自分たちの福祉の力をもう一度掘り起こす必要がある。そして初めて、共生社会が成立する。

共生社会というのは、最近よく言われていますけれども、どこかの白馬の騎士がやってきて、金ぴかの「共生社会」という看板を、「はい」と言って渡してくれるわけではないのです。私たち一人一人が、きちんと自立した存在として関心と共感と想像を持って人と向き合うことができるかどうか。それがなければ、共生社会というのは、単なるもたれ合いの社会です。私たちがきちんと自立した存在として人を認めて、そのうえでつながることができるかどうか。

実は、幻想としての福祉、幻想を振り払った先に見える福祉の力というのは、共生社会に向かって希望となって続いている。誰かが良くしてくれる社会ではなく、私たち自身の地域と社会につながる自己検証、相互批評の営為として、まさに、「希望としてのソーシャルワーク」として、私たちが問われているのだらうと思います。

このことは、「そうはいっても難しいよ」と言う人がいるかもしれない。本当に難しいのだろうか。大きく重い困難の中から顔をまっすぐに上げて、新たな社会に向かって踏み出した15歳の少年がいます。東日本大震災で親しい友達を何人も失いました。その10日後、彼は卒業式の答辞を読みました。最後に、彼の決意は私たちの決意です。

映像

津波で壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市の階上中学校。3月22日、10日遅れで卒業式が行われた。答辞を読んだのは生徒会長の梶原裕太さん。津波で親友3人をなくした。彼は、避難所での卒業式に涙を懸命にこらえ、振り絞るようにして、答辞を読んだ。

「自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私たちの大切なものを容赦なく奪っていきました。

天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。悔しくてたまりません。

しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え生きていくことが、これからの私たちの使命です」

梶原さんが卒業式で示した決意は、見る人の涙を誘い、同時に新たなそれぞれの決意となって、今、全国に広がっている。

15歳の彼は、一片の幻想を持つこともなく、また持つことも許されず、自身の人生と地域の共生のための一歩を踏み出したのだと思います。

福祉関係者は、今よくこういうふうに言います、「1人の100歩より、100人の1歩だ」と。彼とともに共生社会へ、希望への社会に向かって、1人ずつが自らの1歩を歩みだしたいと思います。どうもありがとうございました。